

## 私からのメッセージ

理科の道を選ぼうかどうしようかと考えている後輩の参考になればと思い、私が生物学者になったきっかけを書いてみました。

### 生物学を始めたきっかけ

#### 懸賞に当たったこと

実験に興味を持ったのは、小学校の高学年の時、図書室のクイズに当たって、本をもらったことがきっかけです。子供向けに寺田寅彦、中谷宇吉郎などの科学者の随筆を集めた「科学者の心」(新学社、昭和44年に発行、新書版)という本でした。難しそうな科学の理論にちょっとあこがれを感じ、日常的な事が科学であることに好奇心と感動を持ち、科学者になりたいと思いました。また、中学入学記念に親が買ってくれた時計の懸賞で現金が当たり、大学の実習レベルの光学顕微鏡を買いました。プランクトン、微生物、染色体、たくさんのお小さな物を見ました。どれも美しく、プランクトン学者か細胞学者になりたいとこの頃は思いました。

中学ではバトミントン部と科学実験クラブに入り、区の理科教室にも通っていました。でも、実験が下手で暗記も苦手なので、爆発しそうな化学実験や化学物質の名前を相手にすることはあきらめました。高校で物理好きに変身したのですが、遺伝学の巧妙さに感動し、元来の生き物好きから、結局生物学に進みました。結局というのは、三つ子の魂百までで、子供の頃から昆虫、鳥、小動物などを何時間でも観察していたこと、昆虫は飼育や解剖までしていたことが、動物学を選ぶことになったようです。また、動物が行動し、繁殖するのは見えて飽きませんが、植物は動かないので興味がありませんでした。しかし、今では枯れる寸前(すぐ忘れる)に水をやれば垂れた枝が上に向かうので、植物もなかなか可愛いやつだと思っています。

#### 影響を受けた先生方

理科が好きだったし、クラブ活動も理科だったので、高校までは理科の先生との交流は結構ありました。その後の進路を決める師には大学で始めて出会いました。卒業研究で指導を受けた石居進先生には大恩があります。落ちこぼれの私に自分の性格と実力を大事にしないと常に言ってくれました。いかに落ちこぼれかという、先生と実験結果の議論の際、いつも私は理解できず、先生は怒って椅子を蹴っ飛ばして去ってしまいました。必読の論文を読みきれなかったことは当たり前でした。

石居先生の研究室で鍛えられたことは、忍耐と行動力です。たとえば、暖房の無い部屋で、冷凍した鶏の頭のブロック 500 kg を水に入れて半解凍し、一個ずつ分離するとか、カエルの頭を裁ちバサミで1万匹切るとか、1月から3月まで毎晩、カエルは出ているかな、と片道2時間の公園に通うとか、数十万円のサンプルをうっかりこぼしてしまっても(私ではありません)非難しないとか、などなどが忍耐でしょうか。行動力とは、野外活動への積極性です。研究室内の実験だけでなく、解明しようとする現象を、必ず実際に自然状態で見るのが大事だと学びました。コウモリ、サンショウウオ、イモリ、ヒキガエル、ウグイス、ナメクジウオなどなど、採集と観察と実験に様々なところへ行きました。大学と大学院の間に、恋する動物に新しい現象を見つけるために、どんな忍耐も厭わず、その現象の生物学的意義を説明できれば、動物学者として最高の喜びであると考えた人物が出来あがりました。

東大名誉教授の小林英司先生には、実験室は実験するものという教えと、何歳になっても、どこにいても新しい課題に挑戦できるという粘り強さを学びました。国際基督教大学の小林牧人先生は同年代の恩師です。自分の興味をどこまでも持ち続け、先達に聞いて学ぶ姿勢が最も研究者に必要なことを学びました。数々の悩みがあったとしても信念さえあれば解決できることも外から見ていて納得できました。自分にそれ程の信念があるかどうか、反省することができました。

新たな人格の形成では、東京医科歯科大学の和田勝先生に学びました。卒論の時に和田勝先生が泥の上に転がったバナナを食べたのを見てショックでした。動物学者は何物も汚いと思てはいけなさと教えられました。和田先生からは人のために活動する大切さも学びました。若気のいたりは大たくさんあり過ぎました。今にして思えば、穴に入るだけでは足りず、掘削船で作った地中 10 km の穴に入りたくらいの気持です。かけがえの無い人生の師に恵まれ、夢を持ち続けられたのだと思っています。